

深海紀行 2005

深海 3800メートル・タイタニックへの旅路

かつては「夢の船」といわれたタイタニックは、今では大西洋の海底 3800メートルに静かに眠っている。私はひたすらこの目でタイタニックを見たいと思い、深海への冒険を決意した。それは潜水艇に乗り、往復約 13 時間にも及ぶ深海への旅路であった。私はこのような企画があることを、数年前に北極点に行った際に知った。その情報を元に主催者側に連絡をとり、入念な準備をし、一生懸命働いてお金をため、2005年7月にその企画に参加した。

2005年7月6日、成田空港からカナダ東端にあるニューファンドランドのセントジョーンズまで、およそ丸一日かけて飛んだ。時差の関係で同日の夜中過ぎに到達し、ホテルにチェックインした。その日の午後に全員集まり主催者と打ち合わせをし、ロシア船アカデミックキルディッシュ号に乗船した。その船はまさにジェームズ・キャメロン監督の映画「タイタニック」が撮影された白い船であった。セントジョーンズの港からタイタニック沈没地点まで約一日半の航海である（約 590 キロ）。その間、船内の説明、避難訓練、カメラやビデオ撮影のヒントやスタッフによる講義があった。そして「ミール潜水艇（ロシア語で「平和」という意）の説明と乗船体験があった。ミールは全長 7.8 メートル、幅 3.6 メートル、重さ 18.6 トン、定員 3 人（操縦士 1 人を含む）の大きさ。船内は直径 2.1 メートルと狭いが、この種の潜水艇としては標準の大きさである。船内の窓は真ん中が 200 ミリ、左右に 120 ミリと 3 箇所にある。このような窓から写真やビデオ撮影するのは至難の業だと思った。ミールは「ミール I」と「ミール II」と二艘ある。もちろんこの潜水艇もタイタニックの映画に登場したそのものであり、実際にジェームズ・キャメロン監督も乗船し、映画の撮影にも使用された。





7月9日朝8時頃、タイタニック沈没地点（海上）に到達した。そして第一回目の潜水は翌日の10日と発表。私は第一回目の潜水となり、アメリカ人の女性と同行することとなった。操縦士は、科学者であり、ミールの産みの親（実際に設計された）でもあるアナトリ・スガルビッチ博士自ら行うこととなった。彼はタイタニック映画の撮影

影に大きく貢献した人物であり、また映画の冒頭にも潜水艇操縦士として登場している。彼は、自身ありげに「皆様を深海に眠るタイタニックまで案内します。心配することなく大いに楽しんでください」と言い、最後に「我々のもっとも大切な仕事は、皆様を無事にこの船まで連れ戻すことです」と言って、参加者の不安を一斉に和らいでくれた。私もまさにその一人であった。数年にわたり努力してここまでやってき、不安も拭い去ったつもりであったが、潜水の時期が近づくにつれて不安がよみがえってきた。過去に北極点や南極点などへ行った際には、入念に準備し知識を得ることで不安を払拭し乗り越えてきたが、深海への旅路はなぜだかそうはいかない。今までとはまったく異なる体験だからか、それともすべてを潜水艇のテクノロジーと操縦士の腕にまかせて、この逃げ道のない小さな艇に乗ることへの恐怖なのか。しかしアナトリさんと何回か話をし、過去乗船したことのあるスタッフらと話をしている内に、不安が興奮へと変わり、潜水が待ち遠しくなった。不安材料はもう一つあった。それはトイレである。潜水艇にはトイレはないので、尿瓶のようなもので用をたさなくてはならない。幸い同行する人は同じ女性なのでそれほど気にしなくてもすむが、操縦士は男性である。でもそれも気にすることはない。女性が用をたすことには慣れているし、そのやり方も説明してくれるのは彼自身だからだ。でも過去潜水した人たちの多くが13時間ほどトイレを我慢できたという。また潜水艇が海面から下降するまで20分から30分ほどかかるという。海が荒れていればそのときかなり揺れるらしい。船に決して強くない私にとって、船酔いが大きな心配であった。人それぞれ体質が異なるので、これといった得策はないが、何人かと話をして自分でできそうなやり方を考えた。それは、まず前日のお昼は少し大目に食べる。その後運動をして、食べたものをその日の内に排泄する。夜寝る前に水分を補給すべく水を多めに飲む。その水分も朝出発する前には排泄する。そして腸と膀胱をなるべく空にし、頭のなかで両方とも空であることをインプットする。後は精神的にコントロールするだけである。これでうまくいくかどうか分からないが、これだけ考えて準備するだけでも、トイレと船酔いの心配は薄れ、楽しみが増してきた。そして前日は計画通りうまくできた。そして潜水当日がやってきた。

7月10日

朝6時前には目が覚めた。軽く水分をとり、後方のデッキの上で軽い運動を始めることにした。もちろん朝食は省いた。デッキに行くと私の操縦士であるアナトヤさんがストレッチなどの運動を既に始めていた。13時間近く潜水艇の中で座ったままになるので、体を動かしておくことも必要である。その後、肌着、フリース、タイツ、靴下など事前に説明があったように身に着けた。その上に宇宙服のような青と白の美しいジャンプスーツ（男性は青のみ）を着用し、士気を高めた。さあ、これから出発だ！



朝8時にスタッフとのミーティングが行われた。ミールI号が朝9時15分に、ミールII号が朝10時に出発することが決まった。潜水艇のミールIIにはアメリカ人の親子が乗り込む。酸素マスク、サンドイッチ、果物、菓子類、飲み物、防寒具の用意もしてあるとのことだ。荷物は最小限にするようにとのことだった。チームメンバーの紹介もあった。その中には技術者や、潜水艇をクレーンで吊り上げ、海上に下ろし、潜水し始めるまでの準備をそれぞれ行うスタッフもそろっていた。皆ロシア人である。この作業にはチームワークが不可欠だという。あっけなく10分程度で終わってしまったミーティングだが、私の心からは不安は消え、エキサイティングな気分が満ち溢れていた。一旦船室にもどり、最後のトイレを済ませた。8時45分にミールI号の乗り場へと向かった。



スタッフ達に挨拶して、操縦士であるアナトリさんと軽く話しをした。アナトリさんは、「今日は海が非常に静かなので、海上で潜水艇はそれほど揺れないだろう。快適な潜水になるよ。ラッキーだね。」と言ってくれた。海をよくみると高い波はなさそうであった。出発前に写真撮影とビデオカメラによるインタビューが行われた。今回第一号の潜水なので、仲間のほぼ全員が上方のデッキから声援を送ってくれた。そこから”Masayo!” “Masayo!”と大きな声援が聞こえた。私は第一番目に潜水するので、”No. 1”というジェスチャーをし、その声援に答えた。はしごを上り潜水艇のハッチまで来ると、また大きな声援が

聞こえた。高い場所まで上ってきたので、今度は皆の顔がはっきり見えた。大きく手を振り声援に答えた。

靴を脱いでケースの中に入れ、60センチの狭いハッチをくぐり、座席に足をついた。その後荷物が渡され、座席の後方に置いた。最後にアナトリさんが乗船した。それから直ぐに、ハッチが閉じられた。そして潜水艇はクレーンに吊るされて、海の上を下ろされた。潜水艇の上部で下降の準備が行われている約15分の間だけ潜水艇は揺れたが、酔うほどではなかった。そしてあっという間に下降し始めた。タイタニックまで約2時間に及ぶ旅路の幕が開いた。



9時45分

潜水艇の窓から海の様子を見ていると、水の泡が下か上へと上がっている様子がよく見えた。数百メートルほど潜水すると太陽の光も途絶え、窓の外の景色は真っ暗になった。しかし潜水艇は安定しており、揺れもまったく感じなかったので、潜水している実感がなかった。まるで窓だけが暗い布で覆われ、潜水艇自身は停止しているようにさえ思えた。でもアナトリさんの説明によると潜水艇は渦巻きを描きながら叙々に下降しているという。潜水艇内の温度計は摂氏18度を示していた。まったく寒く感じることはなかった。アナトリさんの巧みは腕で操縦は続けられ、海上との連絡も密に行われた。時々船外の明かりをつけては海の中の様子を見せてくれた。潜水のレベルと位置は前方、側面、後方のレーダーや数字で確認できる。最後の桁数の1メートル単位は約数秒ごとに変わっていった。レーダーでタイタニック船首の位置を確認すると、そこへ向けてまっすぐ下降した。探索の順序は以下のとおりである。まずは船首を見て、それから前方の船の上を見て周り、客室、大階段、操舵席、通信室、その後に船尾へと航海し、エンジンルーム、プロペラと約5時間かけて探索する。途中、潜水艇をどこかに止めて、ピクニックランチもするとか。もちろん食べ物や飲み物を控えたい、また写真やビデオをたくさん撮りたい私にとっては、そんなことはどうでもよかった。いずれにしても深海でピクニックランチを楽しめるほどの精神的余裕など、私にはまったくなかった。

2000メートルほど潜水すると、少し寒く感じ始めた。しかし温度は18度少し切れるくらいあった。アナトリさんが座席の後方に防寒着があることを教えてくれ、とりあえず靴下だけ履くことにした。まるでサンタクロースのプレゼンを入れるような大きく口があいている温かい靴下だった。でも色は青。それを履くと体全体が温かくなり、なんとなく安心した。しばらくすると眠気がしてきた。「寝てもいいよ。着いたら起こしてあげるからね」とアナトリさんは言う。が、彼一人に仕事をさせておいては寝る気分にはなれなかった。しかし彼自身も時々うつらうつらしていたので、少々潜水艇のことも気がかりで眠れなかったことも確かであった。もちろんこれはまったくの「取越し苦労で」あったことに間違いはない。ときどき船内で写真を撮り、ビデオ撮影をしていた。船内にはデジタルカメラとデジタルビデオを二体ずつ持ち込み、一体は船内専用、もう一体はタイタニック撮影専用にした。これはバッテリーや撮影枚数を考えての、私なりの策である。カメラは新たに一眼レフのデジカメを買った。船内では船内用のカメラとビデオを使って撮影した。しかし回りにはあまり撮るものもなく、しばらくすると飽きてきた。潜水艇がまったく揺れることもなく安定していたので、少しでも疲れと緊張を和らぐために、やはり少し休むことにした。しばらくして目をさますと深海のレベルが3000メートルに達していた。あと800メートルほどでタイタニックに到着する。船首の位置に下りられるようにと、潜水艇の位置を多少修正した。それから30分くらいしてから北大西洋の底に到達した。みごとな軟着陸であった。

12時半ごろ

潜水艇の外の照明をつけた後、3800メートルの北大西洋の深海に潜水艇の足が着いた。生まれて初めての海底への着地である。すると深海の魚が私たちを迎えてくれた。こんなところにも魚がいるのかと不思議に思った。あたりにはヒトデやかにかのような生物もいた。しばらくすると待ちに待ったタイタニックが見えてきた。船首である。潜水艇の光だけだと光が当たっている箇所しか見えない。周りはまったくの暗闇である。写真やビデオが取れるか心配であったが、照明は十分に明るく、その心配はなさそうに見えた。タイタニック専用の一眼レフデジカメとビデオカメラを用意し、デジカメは生のRowとJpegが同時に二枚撮影できるように設定した。2ギガ分の用量があったが、失敗した写真はなるべく直ぐに消すようにして、最大限の用量が使えるように心がけた。最初の目的は船首の写真とビデオを撮ること。それに30分以上も費やしてしまった。するとミールII号も降りてきた。その照明がタイタニックの船首にあたり、きれにライトアップしてくれた。ちょうどいいタイミング。それを逃さずに、何枚も写真を撮影した。



写真だけではなく、自分の目にも焼き付けておかななくてはならない。私はじっとタイタニックの船首と見渡せる限りの周辺を眺めた。目に焼き付けた光景は一生忘れることはないものとなった。しかしその思いは複雑であった。かつてタイタニックは不沈船であり、夢の船であった。そして今ではこのように無残な姿に変わり果ててしまった。しかし海底でまっすぐに立っているタイタニックの姿（船の前方のみ）は、今でもその威厳を保っているかのように思えた。海底でも誇らしげに立っているタイタニックは、私にとって悲しい姿であると共に、美しい姿でもあった。私はタイタニックを 1500 名の命を奪った悲惨な船とか、さびに覆われて醜い姿になってしまった幽霊船というよりも、むしろ美船というイメージで捕らえていた。そしてそのタイタニックの姿は、タイタニックへの私の冒険心をますます駆り立てていった。

次にタイタニックの上空を航海した。窓からは大きなチェーンが見え、ウインチ(巻き上げ機)が見えてきた。すると帆柱(マスト)が見えてきた。アナトリが「Iceberg! Iceberg!」と言った。そう、ここはまさに冰山が目撃され、「冰山だ! 冰山だ!」と警告の鐘が鳴り響いた場所である。そのマストも今では横たわっている。



そこから左舷側にわたり、次に操縦席を見た。操舵輪（ステアリングホイール）がひときわ目立った。アナトリさんは潜水艇を安定させて写真が近くで取れるようにしてくれた。まるで手を伸ばせば触れることができるほど鮮明に見えた。きれいな写真やビデオがたくさん撮れた。ここはまさに、舵を最大限にとり冰山からタイタニックを死守しようとしたところである。その後に客室を回った。窓や窓枠もいたってきれいに見えた。そこには富



豪の仲間入りをしたモーリー・ブラウンの船室も見えた。しばらく行くとエキスパンションジョイント（船の骨組などに使われる伸縮継目）が大きく裂けているのが見えた。船が破壊された際の恐ろしさを垣間見たようであった。ちょうどその頃、アナトリさんが操縦に四苦八苦しているように思えた。潜水艇が何かに引っかかったようである。身動きがとれない？まさか！沈黙がしばらく続いた。アナトリさんが私達に「何か話をしていてください」と言った。二人の女性を乗せたのが今回初めてというアナトリさんは、私達二人の大きな声の興奮とおしゃべりに時々うんざりしていたようであったが、このときばかりは違っていた。「冗談であるように！」と心の中で祈っていた私は、「もうタイタニックは十分に見た。もうそろそろ地上に戻ってもいいのではないか」と弱音を吐くほどまでになっていた。どのくらいの時間がたったかはさだかではないが、やっと潜水艇が動き始めた。「これで大丈夫」と自信満々のアナトリさん。この出来事が冗談であったかどうかは知る余地もないが、今ではどうでもよいことだとして、楽しい思い出話しにしている。やっと落ち着きを取り戻し、探索を再開。そして一等船客用のプロムナードデッキ（遊歩甲板）を見たあと、大階段へ。あのタイタニックの映画に写っていた美しい大階段の姿はどこにもなく、大階段だと説明がなければ、まったくわからない状態であった。その上空を通り過ぎて、スミス船長の船室へと向かった。形はとどめていたものの、激しくいたんでいた。あっという間に数時間が過ぎた。もうそろそろピクニックランチでもしようと、アナトリが言ったが、興奮のあまり私も同行者も食べる気分にはなれなかった。それよりもトイレをしなくてもいいように、また潜水艇が海上に上がって揺れた際に酔わな



いように胃の中には何も入れないほうが得策だと思った。誰もランチは食べずに、そのまま一旦船首に戻り、再度船首を側面、前方、斜め、上空から眺めた。やはり私のタイタニックに対する気持ちは変わらず、その尊厳さと美しさに心打たれるばかりであった。

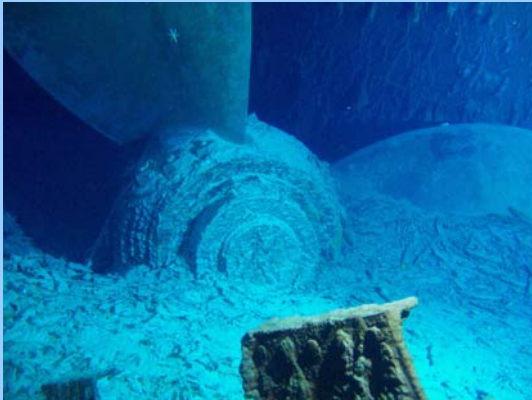
3時ごろ

次に船尾に行き、エンジンルームとプロペラを見に行くことになった。そこまでは30分はかかる。ゆっくりと休んでみたらというアナトリさんの言葉に、私はうなずいた。その瞬間、冷たいものが額の上にたれてきた。私は一瞬ぞっとした。恐怖が私を包み込んだ。窓ガラスにも水らしきものが……。ハッチの上を見るのが怖くなったが、上を見てみるとなんともない。同行者が「水滴だよ」と一言いってくれた。アナトリさんも、「単なる水滴だよ」と言い、タオルで窓ガラスや潜水艇内の水滴を拭いた。そうだ、しばらくすると船内に水滴が生じることを聞いていた。あらかじめ知らされていた知識でもあったので、心配はすぐにふっとんだ。でも額の上にまともにたれてくる一滴は、決して気味の良いものではなかった。潜水艇の温度は摂氏17度くらいであった。それほど寒くはなかった。ふと安心した頃、急に思い出したのがトイレであった。でも今すぐではなかった。というのも膀胱はほぼ空のままであったからだ。でも万が一トイレに行きたくなった場合のことを考えて、あらかじめアナトリさんと同行者に、トイレに行くかもしれないと声をかけておいた。そうこうしている間に、船尾に到着。この部分はタイタニックが真二つに裂けた部分で、船首の部分とは違い、真逆さまに沈没した部分である。三体あるプロペラも実際には二体しか表面に出ておらず、潜水艇が接近できるのはその内の一体だけである。最初にエンジンルームを見た。ビル8階立てに相当するほどの高さのエンジン。その大きさには計り知れないものがある。ほぼ原型のまま残っている放風弁と呼ばれるかなり大きなエンジンの部品も見えた。タイタニックの文字の書かれている看板もかすかに見えた。しか



し激しく裂けているエンジンの姿を見ると、事故当時の凄まじさが伺えるようであった。アナトリさんによるとタイタニックは海底に到達するまでに数分しかかからなかったという。それほど急降下して海底に到達したのだ。船首部分はそのまま垂直に沈み、現在その半分以上が海底に出ている状態だという。船尾部分は直角に沈みそのほと

んどが地中に埋まっているが、海底に出ている部分は垂直に立っている。しばらくエンジンを見てから、プロペラを見に行った。プロペラは最初どれだかわからないほど巨大なものであった。やっと大きな姿が浮かび上がり、その全貌をこの目にする事ができた。アナトリさんは、この場所はタイタニックの内側だと説明する。船尾



の飛び出している部分がちょうどこの潜水艇の上に位置しているからだ。とうとうタイタニックの内部まで来てしまった。ここがタイタニック探索の最後の地点となる。時間は午後五時半。まだ上昇まで30分ほどあるという。アナトリさんが、タイタニックの周辺を散策しようと言った。タイタニックと乗客の遺品がそのまま放置されている場所があるという。海底に潜水艇の足を着けて、海底を這うようにして遺品を捜した。ボトル、お皿、カップなど、多くの遺品がわれずにそのままの状態に散乱していた。お皿やカップの中には完璧な状態で残っているものもあり、そのまますぐにでも使えそうであった。30分ほどかけて遺品を見つけては写真やビデオ撮影した。そして上昇する時間がきた。



夜6時ごろ

次から次へ目の前に迫る今までこの世で見たことのない光景に、私は圧倒され続けていた。あっという間の5時間であった。「もっといたいなあ」と冗談げに言うと、アナトリさんは「今晚ここに泊まっていくか」と聞いてきた。実際に本格的な調査の場合には、海底に一泊するとか……。私は「Not this time, No thank you (今回はいいよ、ありがとね)」と言って、早く地上に戻りたい気持ちを露にしていた。この5時間は短かったのか長かったのか今でもわからないが、タイムマシンに乗って、別世界へ旅したような時空への旅のように感じた。時間というものを感じなかったのかもしれない。海上へは早ければ一時間半で戻れるとのこと。写真や荷物の整理をしながら、今終わったばかりのタイタニックの旅路の話をしてきた。2000メートルくらいから温度が摂氏18度くらいに上がってきたが、返って寒く感じた。残りの防寒具を出して体を温めるようにした。そして夜7時半くらいに海上に浮上した。まだ海の中に太陽の光がさしていたので、夕日前であった。しかし今回は波があったので、酔う可能性が出てきた。酔い袋を片手に用意した。なかなかクレーンが潜水艇を持ち上げてくれない。いったいどうしたのだろうか。準備に手間取っている

のか。20分ほどたってやっと引き上げられた。きれいな夕や焼けが見え、船上にいるスタッフや仲間の顔が見えてきた。帰るべきところに返ってきた。ほっとした。そしてアナトリさんは、私たちを船に戻すという約束を無事に果たしてくれた。

午後8時半

潜水艇が船上に無事着地した。ハッチが開いた。気圧の変化はなかったので、耳がおかしくなることはなく、まして潜水病にかかるようなことは決してなかった。スタッフの顔がハッチの上から見えてきた。そして私たちを船外に出してくれた。ハッチの上へ上がると、仲間が大きな声で声援を送ってくれた。「No. 1 Japanese! 日本人第一号おめでとう」と多くの人たちが祝福してくれた。靴を履いてはしごを降り、船上に降り立った。主催者のリーダーが私にシャンパンをくれた。シャンパンを片手に、はいポーズ！タイタニック沈没地点到達記念写真を撮った。その後に船内カメラマンとドイツ人のカメラマンからインタビューを受けた。「北極点、南極点に続き、日本人第一号として深海に沈没しているタイタニックを見に行くことができました。私の人生でとても幸せな瞬間です」と、私はインタビューに答えた。興奮が冷めない時間がしばらく続いた。しかしもう時間切れ。ジャンプスーツを洗濯するロシア人のおばさんが私が早くスーツを脱ぐのを待っていた。「あちゃった!」。もっとゆっくりとしたかったのに、直ぐに脱がなくては。それどころか、トイレに行かなくては。結局トイレに行くことは今まで完全に忘れていた。最後にトイレに行っ



から約16時間近く。「これも自己最高記録だなあ」と少し誇らしげに思った。その晩は夕食を食べて、シャワーをあび、すぐに寝ようかと思いきや、タイタニックの興奮がこみ上げてきて、夜が更けるまで写真の整理をして、タイタニックの旅路を何度も振り返った。またタイタニックの映画が撮影されたこの船の上を歩きながら、映画のシーンを振り返ったりもした。

エピローグ

タイタニックすべての行事が終わり、セント・ジョーンズへ寄港する日がやってきた。7月15日の夕方に到着。一日早くホテルへ宿泊することになった。そしてその翌日、私にとって思いがけないことが起こった。それはタイタニックの旅にもっともふさわしい結末となった。映画タイタニックの監督であるジェームズ・キャメロンさんに会えたのだ。会えただけではない。一緒にツーショットの写真を撮り（写真）、「日本人初、タイタニック到達おめでとう!」と祝福してくださり、ハグもしてくれた。その様子もしっかりビデオに収めた。「あなたは本当にジェームズ・キャメロン監督ですか」という私の英語の質問

に、「ほんと」と日本語で答えてくれた。長身でハンサムでやさしいカナダ生まれのキャメロン監督。私はすぐさまファンに。その後、数分間にわたる単独インタビューにも成功！これは夢か幻か、それとも現実か。もちろん現実である。世界初タイタニック生映像をテレビで放送するために、やってきたのだ。翌日には船に乗り込むという。キャメロン監督の弟や撮影クルーにも会い、彼らへの取材もできた。私にはもったいないほどの出会いであり、私の「深海タイタニックの旅路」に最高の結末をもたらしてくれた。一生忘れえぬ思い出となった。



最後に、タイタニックについて書いた私の詩を紹介する。

Titanic has known to be the ship of dream, but it is no longer the ship of dream. It is the ship of adventure. It enables us to explore the deep ocean. Titanic is as beautiful as ever before and its beauty will never fade away, as long as our adventure continues.
Masayo Goto

かつてタイタニックは「夢の船」であった。しかし、今では夢の船ではなく、「冒険の船」である。なぜなら私たちを無限の深海の旅に導いてくれるからだ。タイタニックは今までと変わることなく美しい。その美しさは、私たちのタイタニックへの冒険が続く限り、決して薄れることはない。 後藤昌代